東京要塞

海野十三

青空文庫

非常警戒

凍りつくような空からつ風が、舗道ほどうの上をひゅーんというような唸うなり声をあげて滑すべってゆく。もう夜はいたく更ふけていた。遠くに中華そばの流してゆく笛の音が聞える。

丁度ちようどそのころ、築地つきじ本願寺裏から明石町あかしちようにかけて、嚴重な非常警戒網しが布しかれた。

しかし制服の警官はたった二人だけ、あとはみな私服の刑事ばかりが十四、五人。寝鎮ねしずまった家の軒端のきばや、締め忘れた露次ろじに身

をひそめて、掘割ぞいの舗道に注意力をあつめていた。

一体なにごとが始まるのだろうか。

「おい、来たぞ」

「来たか。通行人はどうだろう」

「あつ、向うの屋上から青灯あおとうをたてに振っている。幸さいわい通行人

は一人もないというのだ」

「うむ、うまくいったな」

警官たちの顔つきは、緊張そのものであった。

誰がやって来たというのだろうか。

本願寺裏の掘割ぞいの舗道の方へ、ふらふらと千鳥足の酔漢すいかんがとびこんで来た。

「うーい、いい気持だ。な、なにもいうことはねえや。天下泰平とおいでなすつたね」

取りとめもないひとりごと独白のあとは、鼻にかかる何やら音頭の歌い放し。

すると、その後からまた一人の男が、同じこの横丁にとびこんできた。

前の千鳥足の酔漢は、小ぎつぱりしたもじりがいとう外套をはお羽織った粹いきな風体ふうていだが、後から出てきたのは、よれよれの半纏はんでんをひっかけた見みすぼら窶しい身なりをしている。

だいどう大道も狭いと云わんばかりによろめ蹣跚よろめいてゆく酔漢の背後に、半纏着の男はつつと迫っていった。

「あつ、な、なにをする——」

と酔漢が愕おどろきの声をあげるところを、半纏着の男は酔漢の襟えりがみつかんで、ずでんどうと鋪道になげとばした。

「うぬ、——」

と起きあがろうとするのを、半纏男は背後から馬乗りになつて、何やら棒のようなものでぽかぽかと滅めつた多うち。

ぐたりと伸びるところを、半纏男は足をもつてずるずると堀ばたに引張つてゆき、足蹴あしげにしてどーんと堀の中になげこんだ。

どぼーんと大きな水音が、闇を破つて響きわたった。

ずいぶん乱暴な行為であつた。

しかし警官隊は、林のように鎮まりかえっている。彼等にはこ

の暴行者がまるで映らないようであつた。

なんとという腑ふに落ちないこの場の光景であらうか。

暴行者の半纏着の男は、堀ばたに立つて、じつと水面を見つめていた。五秒、十秒、二十秒……。

すると、彼は何思つたか、手にしていたアルミの弁当箱をがたとんと音をさせて地上に投げだすが早いか、そのまま身を躍らせてどぼーんと堀のなかに飛びこんだ。

「おーい、しつかりしろ」

彼は片手に半はん死しはん半はん生しょうの酔漢を抱えあげた。そしてすっかり

救命者になつて、酔漢を助けながら、のそのそと堀から上つてきた。二人とも泥まみれの濡ぬれ鼠ねずみであつた。

「おい、しつかりしろ。どうしたんだ。傷は浅いぞ。いまどこかの病院へつれてつてやるからな」

と、しきりに介抱かいほうをするのであった。

堀の中に抛ほうりこんだり、それからまた自分も濡れ鼠になつて堀のなかに飛びこんだり、実に御丁寧千万なことだった。

奇怪なのは警官隊の態度だった。映画撮影を見物しているわけでもあるまいし、この暴行を眼の前に見ながら、知らん顔をしているのであった。

折から一台の空円あきえんタクが、スピードをゆるめてこの横丁に入ってきた。

「おい、運転手さん、ちよつと手を貸してくれないか」

半纏着の男は手をあげて叫んだ。

「おう、どうしたどうした」

「いや、酔よっぱら払いが、この堀の中に落っこって、もうすこしで土ど左衛門になるざえもんところだったよ。だいぶ傷はをしているらしいから、その辺の病院まで搬はこんでくれないか」

「うん、よしきた」

円タクは、濡れ鼠の二人を吸いこむと、そのまま明石町の方へ走り去った。

すると、軒端に隠れていた警官隊がぞろぞろと出て来た。

「やあ、どうも御苦労さま。署へかえって、熱いものでも一杯喰べようじゃないか」

「じつとしていたんで、風を引いてしまったよ。はつくしよい」
警官隊は、そろそろと引上げていった。どこまでも奇妙な築地
夜話であつた。

秘密工事

「わしんとこの吉が御厄介ごやつかいになつとりますそうで、——」
と、シン普森病院の受付に、真青まっさおになつてとびこんで来た
五十がらみの請負師うけおいしらしい男があつた。

「誰方どなたでございますか」

と、肉づきのいい看護婦が、憎いほど落ちつき払って聞いた。

「えっ」と五十男は気をのまれた形であつたが、「わしは土木工
事の請負をやっている熊谷五郎造くまがいごろうぞうです。うちの若い者の吉――

というと本名は原口吉治はらぐちきちじてえんですが、どこかで怪我をして、

誰方やらに助けてもらつて、こつちに御厄介になつていと聞きましたが……」

すると看護婦は、軽くうなずいて、

「どうぞお上り下さいまし」

といった。

原口吉治は、ベッドの上にうんうん唸うなっていた。

親方の声を聞くと、さすがにちよつと唸り声をやめたが、しばらくすると、またたまらなくなつて前よりひどく唸りだした。

「どうしたんだ、吉。だからあれくらい云つといたじゃねえか。酒を呑みあるいちやいけない。もし呑むんだつたら、わしの家で呑め、それなら間違ひもなくて済すむからと、あれほど云つて置いたのに、これじゃしようがないじゃないか」

と見舞いに来たのか、叱しかりに来たのか分らない親方五郎造だつた。

「親方、当人は相当ひどい怪我をしているんですよ。それに私が通りかからなきや、命を落とすところだったんです。あまりガミガミ云つちや可かわい哀いそうですよ」

と、隅に腰を下ろしていた髭蓬々ひげぼうぼうの男がいった。彼は病院で借りたのらしい白いネルの病衣びょういを二枚重ねて着ていた。

「おお、お前さんでしたね、わしのところへ知らせて下すつたのは。そして吉も助けてもらって、どうも今度は、たいへん御厄介になつて済みませんです」

「いや、なんでもありません」

「いづれ後から、御礼はいたします」

「その御心配には及びませんよ」

そういつたこの男の言葉は、偽りいつわがなかつた。自分で抛なげこんで置いて、自分で助けたんだから、礼をされる筋すじ合あはない筈だだつた。

五郎造は、病人の枕許でひどく弱つたらしい顔をしていた。それは病人の容態ようたいに対する心配だけではないように思われた。

「……ちよつ、仕様しようがねえやつだ。これじゃ云い訳わけが立たないや。明日の朝は——これはえれえことになつたぞ」

五郎造はぶつぶつひとりごと 独 白をいっては、腹を立てていた。吉治の怪我で、彼はなにか大変困つたことに直面しているらしい様子だつた。

生命救助者を装う髭蓬々の男は、濡れていた半纏いとまごが乾いたといふので、これに着かえながら、そろそろ暇いとまご乞こいをする気色けはいに見えた。

「おう、もうお帰りですかい。そうだ、お前さんの名刺を一枚下

さいな。お礼にゆかなきやなりませんからね」

すると半纏男は笑いながら、

「お礼には及びませんよ。それに、私は名刺なんか持っていないんです。月島つきしま二丁目に住んでいる正木正太まさきしょうたという左官なんです」

「ええつ、左官。するとお前さんは、近頃のコンクリート工事なんかやったことがあるのかね」

「ええ、すこしは覚えがあるんですが、大した腕でもありませんよ。なにしろ仕事がなくて、毎日、あっちこっちをうろついているのですからね」

「ふふーん、そうかい。そういうことなら、正太さんとやら、わ

しは一つお前さんに相談があるんだがね。いや、もちろんうちの者を助けてくれたお礼心から、ちとばかりお前さんに儲けさせようというんだ。実はね、ま、こつちへ来なさい」

と五郎造は正木正太を病院の廊下へ連れだした。深夜のこととて他に面会人も歩いていず、そのあたりは湖水の底のようにしんと鎮まりかえっていた。

「こいつは他言して貰つちや困る。お前さんだから、信用してうちあけるんだが——」

と前提して、五郎造親方は、いまやりかかっている或る秘密の土木工事があつて、そこへ働きにゆく気はないか、なにしろ人員は厳選してある上に、一人足りなくても先方から喧しくいわれる

のだ。今夜吉治が怪我をしてしまったため、明朝は左官が一人足りなくなる。そのために先方からどんな苦情をうけるかと思うと、彼は気が気でないのだと包み隠さずにいつて、この寒かんちゆうひたい中に額にびっしよりとかいた汗をハンカチ手で拭ぬぐった。

「幸いお前さんが、左官をやれるというから、これはもつけのことでだ。これも因いんねん縁だと思うから、一つやって見ては」

「でも、なんだか気味がわるいですね。秘密の工事なんて」

「いや、そう思うだけのこと、やっていことは普通の工事なんだ。ただ行くときと、帰るときに、目隠しをされるというだけのこと。手間賃てまぢんは一日七円だ。普通の倍だぜ」

「だって、いくら吉治さんが怪我でゆけないとしても、全然新顔

の私が行ったんじや、先方で入れないでしょう」

「うん、そのことだが——」と五郎造は幾分苦しそうに眼玉を白黒させていたが、

「なあに、生命いのちを助けてくれたお前さんのことだあね、先方が信用するように、わしの親類とかなんとかいっとくよ。何しろ職人の数が揃わないことには、前もってちゃんと決っている工事がそのように進まないことになるから、わしはうんと叱られた上、大変な罰金をとられることになっているんだ。だからお前さんがいつてくれりや、吉治の分も、わしの分も、二重の生命の恩人となるわけだよ。ね、いいだろう。一つうんと承知をしてくれよ」

正木正太と名乗る半纏着の男は、ようやくのことで五郎造の薦すす

めを応諾おうだくした。そしてシン普森病院を辞去じきよしたのであるが、彼は寒夜かんやの星を仰ぎあおながら、誰にいうともなく、次のようなことを呟つぶやいたのだった。

「どうも古くさい狂言きょうげんだ。だが、古いものは古いほど安心あんしんして使える、といわれるが、なるほど尤もつともな話わだなあ」

忠魂塔

その当時、極東には国際問題をめぐって、ただならぬ暗雲が立

ちこめていた。

中国大陸には、大きな戦争が続いていたし、その戦争に捲きこまれていないいくつかの大国も、てんでに武装戦備を整えて、いつでも戦雲渦巻くその中心へ向って進撃できるように、すっかり準備は出来上っていた。

従つてわが東京における諸外国大使の動きも非常に活潑であつて、或る物識りの故老の言葉を借りると、歐洲大戦当時、ロンドンにおける外交戦の多彩活況も、これには遠くおよばないそうである。

中でも、国民の注目を一番強く集めていたのは、老獺なる外交ぶりをもって聞える某大国であつた。

日中戦争が始まって間もなく、既にもうこの某大国の動向が、国民の注目を惹いたものであるが、その当時はどつちかというところ、中国の方に相当積極的な同情を示していた。ところがその後、わが日本軍が各地に輝かしい戦績をおさめ、極東のことに關しては日本の同意なしには何一つやれないような事態となつたと知るや、某大国はいちはやく態度を豹^{ひょう}変^{へん}し、内面はともかくも表面的には中国に対する同情をひっこめ、そしてひたすら日本の御機嫌をとりむすぶように変つた。それはまるで小皺^{こじわ}のよつた年増女のサーヴィスのように、気味のわるいものだつた。

その年の秋が冬に変わろうという十一月の候、例の某大国は日本国民の前にびっくりするようないきな贈物をするというニュース

を披露ひろうした。それはかつて歐洲大戦の砌みぎり、遙々はるばる歐洲の戦場に参戦して不幸にも陣歿したわが義勇兵たちのため建こんりゆう立りゆうしてあつた忠魂塔と、同じ形同じ大きさの記念塔をもう一つ作つて、わが国に贈ろうという企てくわだであつた。

正直なところ、わが国民は某大国のこの好意に面喰めんくらつた。何につけ彼かにつけ日本の邪魔ばかりをしている憎い奴だと思つていた某大国から、この由緒ゆいしよある途方もない大きな贈物をおくられて、愕おどろかぬ者があるうか。

その忠魂塔は東京市に建てられることになつた。そのために市の吏員は、敷地を公園にもとめて探しまわつた結果、S公園内に建てるといふことに決つた。そして大急ぎでもつて御影石みかげいしの台だ

石いしを作ることになった。

東京市内では、この忠魂塔のことでよるとさわると話の花が咲くのであった。

「あれで見ると、某大国もやっぱり日本に敬意をもっていないわけじゃないんだね」

「うん、僕も平へい生せいすこし悪口をいいすぎたよ。あの記念塔は写真で見ただが、高さが五十メートルもあるというから、とてもでっかいものだよ。塔下の一番太いところの直径が二メートル近くもあるそうだからね」

「ほほう、そうか。たいへんな物だね。そんな大きなものをどんな風にして日本まで持つてくるつもりだろうか」

「さあ。もちろん塔の途中からいくつかに小さく折って持ってきて、こつちで、接ぎあわすんだろうよ。そのままじゃ、とても船にも載せられないし、陸へあげても列車にも積めないし、町を引張^{つば}りまわすことも出来やしないからね」

そんな話が、あつちでもこつちでも取り交^{かわ}されているうちに、更に国民を愕かせるニュースが入ってきた。

それは例の忠魂記念塔を、某大国の一等巡洋艦がわざわざ積んで、日本まで廻航してくるといふ報道であつた。

「本国政府は、この機に際し、親愛なる日本国民に敬意を表さんがため、記念塔を特に一等巡洋艦マール号に積^{せき}載^{さい}してお届けすることにしました」

とは、駐日某大国大使パット氏が、新聞記者団を引見して、莞爾^{んじ}として語ったところであつた。

その新聞記事を読んだ国民は、更に某大国の厚意に感激した。しかし一部の識者は、逆に眉を顰^{ひそ}めた。

「これはどうも変だね。某大国はこの頃になつて急に日本を好意攻めにするじゃないか。忠魂記念塔を新調して贈つてくれるというのさえ大変なことなのに、その上、昨年建造したばかりの精鋭マール号をその荷船として派遣するなんて、ちと大袈裟^{おおげさ}すぎると思わないか」

「時局がら新造艦マール号の性能試験をやる意味もあるんじゃないかね」

「そんなことなら、なにも極東まで来なくてもよさそうなものだ。これは何か、日本近海の測量を目的にしているのじゃないかな」

「そんなら何もマール号を煩わづらわさずとも、中国艦隊にやらせばいいことじゃないか」

「どうも分らん。しかしマール号の極東派遣をうっかり喜んでいられないということだけは分る」

遣日艦マール号

この遣日艦マール号は、十二月一日、無事芝浦埠頭しばうらふとうに着いた。出迎えと見物とに集った十万人ちかい東京市民の間を、マール号の陸戦隊員二百名が、例の記念塔を砲車牽引車けんいんしゃに積んで、肅しくしゆく々と市中を行進した。

それを見ると忠魂記念塔は、長いままではなく、七つの部分に切断され、一つ一つがそれぞれ前後二台の牽引車によつて搬はこばれていったのである。

派遣部隊の長列は、町の大通りを大きな音をたてて行進し、この塔が建設されるS公園の前を通り、やがて某大国大使館の中に入った。

公表されたところによると、このバラバラの記念塔は、大使館

内で荷を解かれ、罅^{ひび}や傷の有無を十分に確かめた上で、三日後には華々しくS公園へ搬びこまれ、盛大な儀式が行われることになっていた。

その前夜、大使パット氏は、AKのスタディオから全国中継をもつて、忠魂記念塔の到着を披露し、

「——どうか御安心下さい。本国から随伴してきた工^{こう}廠^{しょう}技師の厳密な試験によりまして、七個からなる忠魂塔の各区分には、いささかの罅も入っていない実に立派なものであるということを経^していただくことができました。いずれ明日の式場で、これをお目に懸けられるわけですが、あとは卓越した日本の土木建築家の手によりまして、足場を組んで建てていただくつもりでござ

ざいます」

などと挨拶あいさつ放送をやつて、全国民をまた一ひとしお入感激させたのであつた。

その忠魂記念塔は、今ではS公園内に天てんくう空を摩まして毅然きぜんと建つている。そして市民たちは、毎日のようにこの新名所の前に集まつてきて、かつて欧州の野に赤き血潮を流した勇敢なる日本義勇兵の奮戦ぶりを偲しのんで、涙なみだを催もよおしているのであつた。

そして今では、一般国民の某大国に対する感情も以前とはことかわり、たいへん穏おだやかになつたのであるが、果して某大国はわが帝国に心からなる敬愛を捧げてくれているのであろうか。

いや、それは残念ながら、そうではなかつたようである。たと

えば今、外国密偵団の監視をやっている有名な青年探偵帆村莊ほむらそうろ六くが、数日前その筋から示唆しそくをうけた話の内容について考えてみるのが早わかりがするであろう。

「某大国の南太平洋における防備は、わずかこの半年の間に、従来の五倍大になった。飛行機、爆弾、燃料、食糧、被服などは、どの倉庫にも一杯になって、中には急造バラックの中に抛ほうりこまれているものもある。某大国は明かに日本に対して攻撃姿勢をとっているのだ。わが帝都ていとをはじめ、各地の重要地点を一挙にして空爆しようと思つてその機会を狙っていることは実に明かである。しかもこの際最も注意を要することは、かの老ろう獐じょうなる某大国の作戦計画として、開戦の最も初期において帝都における諸機関を

一挙にして破壊し去ろうとしているらしい。われわれの知りたいのは、かの某大国がいかなるところを狙っているかということだ。それが分れば、敵の今後の戦略がかなりはつきり見当がつこうというものだ。帆村君。この際、君の奮起を望むというのも、一いつにこの点に皇国の興こうはい廃はいが懸かかっているからだ」

この話で見ると、某大国はキューピーの面を被かぶりながら、その面の下でもって恐ろしい牙を鳴らしているとしたか思われない。

こうして某大国の戦意ははつきり読めるのであるが、早く知らなければならぬことは、これから某国がとろうとしている実際の攻撃計画がどんなものであるかということだった。東京市についていうなら、一体某大国の爆撃機は、どこどこを狙っているの

だろうか。破甲弾はこうだんはどことどこに落とすつもりか。焼夷弾しょういだんはどの位もつて来て、どの辺の地区に抛なげおとすのであろうか。また毒瓦斯どくガス弾はいかなる順序で、いかなる時機を狙まって撒くのであろうかなどということが、この際早くわかっていなければならぬ。

もちろん軍部をはじめ諸官省や諸機関においては、最大の注意力を傾かたむけて、この恐るべき外敵の攻撃を防ぐことを考えている。しかしそれには、敵の手にどんな武器が握にぎられているかを知ることが出来れば、防ぐにも一層便利でもあり、かつ有効な措置がとれるのであった。

帆村莊六は、某大国の機密を何とかして探りあてたいと、寝食

を忘れてきょうほん狂奔したが、敵もさる者で、なかなか尻尾をつかま
 せない。流石さすがの帆村も、ちと腐りくさ気味ぎみでいたところ、ふと彼の注
 意を惹ひいたデマ罰金事件があつた。

それは警察署の聴取書綴ききとりしよつづりのなかから発見したものであつた
 が、事件は築地の或る公衆浴場の流し場で、仲間同士らしい裸の
 客がわあわあ喋しゃべっているのを、盗み聞きしていた一浴客よつきやくが、
 後にまたそれを他の者へ得々として喋しゃべっているとところを御用とな
 ったものであつた。

そのデマによると、当夜浴場の流し場で喋しゃべっていた本人は、ど
 うやら左官職らしかったという。彼は仲間連中から、どうも手前てめえ
 はこのごろいやに金使いが荒いが、なにか悪いことをやっている

んじやないかと擲揄からかわれ、彼の男は顔赤らめて云うには、実はこ
こだけの話だが、この頃おれは鳥渡ちよつとうまい儲け仕事にいつてい
るんだ。毎朝或る場所へゆくと、そこで目隠しをしたまま自動車
に乗せられ、一時間半も揺ゆられながら引き廻された揚句あげく、変な密
室のなかに下ろされる。そこで一日左官の仕事をやっている、
夕方にはまた目隠しをしたまま自動車に乗せられ、元の場所へ帰
ってくる。この仕事は気味がわるいが一日七円にもなるので、我
慢していつているんだと、いささか得意げに語っていたという。

仲間のものは、その男の儲ける金のことよりも、目隠しをして
どこかに連れてゆかれるという獵りようき奇的な話がすっかり気に入っ
てしまい、へへえ、それで手前はそこでどんな仕事をしているん

だと聞けば、かの男は、それがどうもよく分らない仕事なんだが、とにかく三百坪ぐらいもあるとても広くて天井の高い工場みたいな建物の床を漆喰しっくいみたいなものにくで塗っているんだが、その漆喰が変な漆喰で、なかなか使い難いやつなんだ。そのために仕事もなかなか思うように進まず、まだ半分ぐらいしか塗っていないという。

すると友達が、その三百坪もあつて背の高い謎の工場というのは、どこにあるか、窓から見える外の様子とか、近所から聞える物音とかで、およそこは江東こうとうらしいとか大森らしいとか分りそうなものじゃないかというのと、かの男ははげしく首をふつて、うんにやそれが分るものかい、その今いった工場みたいな建物に

は、窓が一つもついていないんだ。全部壁で密閉してあって、電灯が燦然さんぜんとついている。物音なんて、なにも入つて来ない。深しん山さんのなかのように静かなところさと答えた。

じゃあ、どこか地下室なんだろうと友達がいうと、そうじゃない。高い天井を見上げると、亜鉛板あえんばんで屋根がふいてあるのが見えるから、地下室ではなくて、これはやはり地上に建っている普通の建物にちがいないと断言したというのである。起訴されたデマ犯人は、これについてなお自分の逞たくましい想像を織り交ぜて喋っていたところから、遂に罰金五十円也の申渡しと与えられたと書いてある。

帆村莊六は、この聴取書の話をつたいへん面白く思った。そこで

彼は一つの計画をたてて活動に入ったのであるが、始めに述べた築地本願寺裏の掘割における活劇も、実はこのデマ事件からの発展なのであって、堀のなかに投げこまれて大怪我をした吉治は、かの浴場で仲間に、ここだけの話をぶちまけた主であり、警官に見て見ぬふりをさせ、皇国の興廢にかかるとはいえ、この吉治に心ならずも傷害を与えた正木正太という左官こそ、とりもなおさず帆村探偵のかしよう仮称にちがいはなかったのである。

身代りの探偵

左官正太を名乗る帆村探偵は、巧みに吉治の後あとがま釜に入りこんだ。

その翌朝は、親方五郎造から注意されたとおり、午前六時すこし前には早くもこの一団の集合場所である南みなみせんじゆ千住の終点に突つ立たつていた。彼の手には左官道具と弁当箱が大事そうに握にぎられていた。

親方の五郎造が最後にやってきた。それでこの南千住の終点に集まる六人組の顔が全部そろつたのであつた。五郎造は、探偵帆村の化けこんでいるのとも知らず、正太と名乗るこの新入りの左官のことを、これは自分の女房いとこの従弟だ、どうか仲よくしてやっ

てくれと、他の仲間に引合わした。

帆村探偵は、それから先どうなるのかと、ひそかに好奇の眼を光らせていると、やがて十分も経ったと思う頃、

「やあ、来た来た」

と仲間の一人がいうので、その方を見ていると、一人のよぼよぼの婆さんが怒ったような顔をして一行に近づいてきた。

「——おう親方、吉治がいねえじゃねえか」

と、婆さんはでんぼう伝法な口を利いた。

「うん、そのことだよ。実は——」

といって、親方はまた吉治が不慮ふりよの怪我けがで入院したことから、

その代りに女房の従弟の正木正太を連れて来たが、この人物は保

証するといふようなことを、婆さんの耳許みみもとに囁かんでふくめるように説明しなければならなかつた。

「おい、大丈夫かい。間違いはなかるうね」

と婆さんは、眼をぎよろりと光らせて五郎造と帆村探偵とを睨にらんだ。

帆村は、頭を搔かきながらぺこぺこ頭を下げた。いかにも職人らしい風を装よそおつて。

ようやく婆さんの信用をかちえて、一行は歩きだした。やがて着いたところは、ごみごみした横丁にあるバラック建ての婆さんの家だつた。その中に入ってゆくと、土間伝いに裏に抜けるようになつてゐる。そこにまた一つの潜くぐり戸があつて、それを婆さん

が開けてくれた。

そこを潜ると、^{かび}黴くさい真暗な倉庫の中に出る。妙なところへ連れこまれたなあと思っっているうちに眼が暗^{やみ}になれてくる。するとこのだだっ広い倉庫の中に、牛乳を搬^{はこ}ぶのに使うような一台の箱型トラックが置いてあるのに気がついた。

すると何処からともなく人が出てきて、この運転台に乗った。別の人が、ぱつと五燭^{しよく}の電灯をつけた。その人は妙な形の頭巾^{ずきん}をもっていて、それを五郎造の率いる一行の一人一人の頭の上からすぼりと被^{かぶ}せた。

帆村もとうとうこの頭巾を被せられてしまった。息のつまるよ
うな厚い布で出来た囊^{ふくろ}だ。頸^{くび}のところをバンドを締め、御丁寧に

がちやんと錠がかかった。こうして置けば、いくら頭巾を脱ごうとしても脱げない道理だった。

それが済むと、帆村たちは箱型トラックの中に手を執とつて入れられた。扉がぴちんとしまつて、中から鍵がかかる。誰か一人、やといぬし備主の側の番人が乗りこんでゆくらしい。誰も物を云う者がない。

そのうちに、倉庫の戸がぎいぎいと開く音が聞え、それとともにトラックは徐じよじよ々に動きだした。いよいよ秘密の場所への旅行が始まったわけであつた。

ごんごんと揺ゆられながら、帆村はトラックの通りゆく道筋を、一生懸命に暗記しようとしてつとめた。

右か左かへ曲ると、慣性の理によつて、どつちかへ身体がぐぐつとお圧されるので、それとわかつた。

狭い道では、車はごとごととしきりに揺れたし、広い道へ出ると、すうすうと滑るように走つた。

しかし運転手は非常に気をつけているようで、しばらくゆくとスピードが殆んど一定となり、道を曲ることさえなくなつた。もちろん十字路のストップは一度も喰くわなかつた。なんだか郊外の方へ一本道にずんずんと進んでゆくように感ぜられたが、そのうちに数台の消防自動車のサイレンが喧やかましく街を走っているのが聞えたので、ここはやはり東京市内だなと思つた。

それからまだ小一時間もトラックはごとごとと走つた揚句あげく、ご

ろごろと下り坂を下りてゆくような気がしたと思ったら、やがて車はごとんと停った。

これでいよいよ一時間半の長い旅行を終ったのである。ここは何処であるのか、帆村には一向見当がつかなかった。道順も始めのうちは覚えていたが、途中から皆かいつもく目わからなくなった。

一行はトラックの中から、そろそろと下に下りた。長い廊下を手を引き合つて歩いてゆくと、やがて扉の明く音がして、一行はまたその中に導き入れられた。すると一緒についてきた番人が、頭巾の錠をがちやんがちやんと外はずしてくれた。帆村は頭巾をかなぐり脱ぐと、深い息をしながら、あたりを見廻した。

(なるほど、ここだ。あの聴取書に書いてあった三百坪の天井の

高い工場とはここのことをいうのだな)

話にあつたとおり窓が一つもない。電灯は煌々こうこうとついていて昼間のように明るい、ここにいたのでは昼だか夜だか分らない。五郎造は引率いんそつしてきた五人の左官を呼びあつめると、今日の仕事の分担をそれぞれ云い渡した。そしてすぐさま仕事にとりかかった。

帆村の仕事は、米さんべいという一人の左官について、一緒に床に特殊の漆喰しつくいを塗ることだった。

それとなく辺りを窺うかがうと、この室内には一行六人の外に彼等を連れてきた逞たくましい髭面ひげづらの番人が一人、そのほかにこの工場の人らしい職工ズボンを履はいた男が三人いて、こっちの仕事ぶりをじ

つと監視していた。

五郎造はこの三人の男のことを、松監督さん、竹監督さん、梅監督さんと呼んでいたが、もちろんそれはこの中での符牒ふちようであるにちがいがなかった。

さあ、ここが帆村のためには重大な戦場なのであった。このがらんとした亜鉛トタン屋根の工場とも倉庫とも見える建物内こそ、そこに秘められている大秘密をあばきつくすため、彼の智囊ちのうを傾けつくさねばならぬ大戦場だった。しかしこの簡単な建物の中から、一体どんな手懸りが得られるというんだらう。半ばなかやりかかった漆喰ゆかの床と、チョコレート色の壁と、亜鉛板トタンを張った天井と、簡単な鉄の肋材ろくざいと、電灯と、たったそれだけの集った場所に過ぎ

ない。果してこの中から、思うような重大秘密が嗅ぎだせるものであるか。

臭いの研究

米さんに従って、帆村探偵は黙々と本職らしい鍔こてを動かしつつけた。

器用な彼は、平常へいぜい暇のあるごとに、色々な仕事を習い覚えていて、今度のような万一の場合には、すぐどんな職人にも化け

られるように訓練を積んであった。

帆村がいま踏んでいる足の下は、相当しつかりしたコンクリートの床になっていた。漆喰をその上に、約二センチメートルの厚さで塗ってゆくのであった。

この漆喰は、かねて話に聞いたとおり、普通の漆喰とは異つたものであった。石灰せっかいと赤土あかつちだけは普通のものを使うが、ふの

りは使わず、その代り何だか妙にどろどろしたものや、外に二、三種の化学薬品を混入するのであった。それらを交まぜあわすのがなかなか厄介であり、それからうまく交まぎった後は、早いところ塗ぬってしまわないと、直ぐ固かまつてしまうのだった。つい凹でこ凸ぼこが出来たり、罅ひびや筋が入る。すると松竹梅の三監督がやってきて、

やり直しを命ずる。なかなか骨の折れる仕事だった。

この特殊な漆喰は、一体どんな特長があるのであろうか。

帆村の気づいたところは、第一に非常に早^{はや}乾^{がわ}きがすること、

第二に、固まってしまえば鋼^{はがね}のような強い弾力を帯びること、第

三に耐熱性に富んでいるらしい非常に優秀な漆喰だった。すくなくとも市場には、こんなに勝^{すぐ}れた漆喰が知られていない。

そういう優秀な漆喰をここに敷^しくという目的は、どういうところにあるのだろうか。

普通の機械工場なら、こんな漆喰を塗るまでもなく、その下のコンクリート土台だけで十分であった。贅^{ぜい}沢^{たく}な場合でも、その

上に僅かのアスファルトを流しこめばいいのだ。それにも拘^{かかわ}らず、

普通以上の強^{きようじん} 韌^{じん}さを漆喰で持たせようというには、何か訳がなければならぬ。この平々^{へいへいたんたん} 坦々^{たんたん}たる床の上に、そも如何なる物品が載るのであろうか。帆村はせつせと鋺を動かしながらもそれを想つて、何とはなく背中がぞくぞくと寒くなるのを覺えた。

その日の所見を、その後、某大官の前で、帆村は次のように報告している。

「なんとかしてその漆喰の見本を、せめて定性分析の出来るくらいの少量でも持つてこようと思いましたが、監視が嚴重なので控えました」

「爪の間に入れるとか、頭髮の中にこぼすとか、なんとかいい方

法がありそうなものじゃないか」

「そんなことは向うで百も承知ですよ。いよいよ仕事が終わったというときには、僕たちは強制的に風呂の中に入れられてしまうのです。その風呂には、女がいましたね。僕たちの頭のとっぺんから足の爪まですっかり洗ってくれるのです。爪はきれいに截きつた上、御丁寧にブラツシユをかけるという始末です。外へ出ると、服はすっかり着がえさせられます。履物はきものやマットまで変るので、恐らく嚴重きわを極めていきますよ」

「ふーむ、莫迦ばかに細心にやっているんだね」

大官は心から感嘆している様子だった。

「ねえ帆村君。これはあまり大きな声でいえないことだが、君が

いま行っている仕事場は、ひよつとすると何かわが警備関係の防空室とかいう筋合のものではないのかね」

「ええ、それは——」

「もしそうだとすると、君は自国の機密建物を調べていることになつて、大損おおぞんをするよ」

「そうです。貴官あなたの仰おっしゃ有るとおりの疑問を、僕も持ちました。

僕も実は最初からそれを考えていたんです。しかし僕はあの建物のが、すくなくとも我が警備関係のものではない証拠をつきとめたのです」

「ほほう、それはよかつた。で、その証拠というのは、一体どんなものだ」

大官は眼鏡ごしに、ちらと黒眼を動かした。

「その証拠というのは、臭いなんです」

「えっ、臭いとは」

「臭いというものについて、一般の人はわりあい不注意ですよ。

しかし臭いの研究というものは莫迦にならぬものです。日本人が

寄れば、なんとなく沢たくあん庵あんくさいといわれます。これはつまり日

本人の身体からは、食物の特殊性からくる独特の臭いが発散して

いるのです。日本人同士では、お互たがいに同じ沢庵臭をもっているの

でそれと分りませんが、外国人にはそれがたいへんよく匂う」

「うむ、なるほど。で、君は例の仕事場でもって、何か特別の臭

いを嗅ぎつけたのかね」

「そうです。僕はトラックを下りて、廊下をひったてられてゆくときに、早くもその独得の臭いに気がつきました。浴場で着物を着がえたりするときにも気がつきました。それから監督の傍によつてもその臭いが感ぜられました。断じてあの場所は、日本人の経営している場所ではありません」

「それは大変だ。でもその監督は日本人じゃないのかい」

「中国人ですよ。浴場にいる女も、やはり中国人だと思います」

「じゃ、それは中国人の工場でもあるのかね」

「いや、臭いというやつは、もつともつと複雑です。あの場所の匂いというのがあります。それはどうも、あのチョコレート色の塗料のせいだと思いますが、これは些いささかか僕の自信のある研究なん

ですが、あの建物は某大関係のものだと思えますよ」

「そうか、某大か」と大官は大きく肯うなずいた。

「それは偉大な発見だが、しかし惜おしいことに、この場所が分らない」

「場所は分らぬことはないと思います。明日僕の後を誰かにつけさせ、箱自動車の後を追跡すればいいではありませんか」

「なるほど、そうやればいいわけだね」

大官は莞爾かんじと笑った。

自記地震計

その翌朝のことだった。

帆村探偵はまた左官の道具と弁当箱とをさげて、南千住の終点へいった。

私服刑事からなる別動隊は、帆村の行動を遠方からじつと見守っている。

定刻の午前六時になった。

「変だなあ、誰も来ないじゃないか」

定刻になっても、昨日の顔ぶれは誰一人として集って来なかった。肝腎かんじんの五郎造親方さえ顔を見せなかった。

「これは失敗しまった」

帆村が叫んだ。もう遅かった。敵はすっかり勘づいてしまったらしい。

仕方なく私服刑事の一隊に命令をさずけて、トラックの入っている筈の倉庫の中を覗のぞかせたが、そんなものは入っていないということが分ったばかりで、何の足たしにもならなかった。

どうして帆村のことが分ったのだろうか。

シン普森病院に電話をかけて、怪我人原口吉治の様子をたずねると、看護婦が電話口に現れて、あの方なら昨夜御退院になりましたという。愕おどろいて聞きかえしたが、全くそのとおりだった。

引取人はと聞けば、どうやら親方の五郎造らしく思われた。

貴重なる搜索網が、ぷつんと破れてしまった形だった。帆村は地団駄じだんだふんで口惜くやくしがったが、もうどうすることも出来ない。

とりあえずこの大事件を大官に報告して、指揮あおを仰いだ。

怪我人の原口吉治が、他の病院に入っているかも知れないとい
うので、京浜地方に亘わたって調べてみたが、得るところがなかった。
シンプソン病院では、それほど大した怪我でなかったから、入院
しないでいいかもしれないという話だった。

とにかく大きな魚が逃げた。

この上は、夜に入つて、五郎造親方が帰宅するところところを捕とらえて、
これを説諭せつゆするほかない。お前も日本人だろうが、某大国に雇わ
れているのを知らないわけじゃなからう。そんならあの工事場の

秘密を知っているかぎり打ち明けろ、などと責めるより外ほかはないのだ。

ところが、物事がうまく行かないときは、どこまでも失敗が近づいた。というのは、五郎造がその夜とうとう帰宅しなかつたことである。

尤ももつとその夜ふけ、家には速達が届いた。それには五郎造の筆ひっせ蹟きでもって、工事の都合で当分向うへ泊りこむから心配するなと書いてあった。

奇怪なることである。どこから知れたことか分らないが、とにかく向うでは気がついて職人たちを帰宅させないことにしたのだ。そうなる、こつちの捜索は殆ど絶望というほかない。

「うーむ、失敗も失敗も、大失敗をやってしまった」

帆村探偵は、頭をおき圧えて懊惱おうのうしたが、もはやどうにもならなかった。

そうかといって、これほどの大事件を、このまま捨てて置くわけにはゆかなかつた。官憲はともかくも、帆村自身はなんとか再び例の秘密工事場に達する路を発見したいものと日夜そればかりを考究した。

それから一週間ばかり後のことであつた。

帆村の熱情が神に通じたのか、彼はゆくりなくも重大なる事柄を思い出した。

それは例の工事場で働いていたとき、その中ではないが、どこ

かその附近でもって、しきりに杵打ち作業をやっているらしい地響ひびきを聞いたことであつた。

それについて、彼は今まですっかり忘れていた重大なる手懸りを発見したのだ。それはその杵打ちの音が、とんとんとんとという具合になめらかなに行かず、或るところで引懸ひっかかるようにとんとんとんとという特徴のある音をたてることであつた。歯車の歯の一つが欠けているのか、或はまたロープにくびたところでもあるのか、とにかく不整な響を発するのであつた。

「こいつは締しめた。もつと早く気がつけばよかつたんだが」

帆村は躍りあがつて悦よろこんだ。彼はとんとんとんとという不整音せいおんの地響を、どう利用するつもりであろうか。

彼はすぐさま家を飛びだして、帝国大学の地震学教室に駆けつけた。そこで教授に面会して、携帯用の自記地震計の貸与^{たひよかた}方を願^{こころよ}い^{こころよ}いでた。教授は事情を聞いて、快く教室にあるだけのものを貸してくれた上、数人の助手までつけてくれることになった。

帆村の眼は、久しぶりに生々^{いきいき}と輝いた。彼はこの自記地震計をもつて、かのとんとんとんとという不整な地響のする地点を探しあてるつもりだった。もちろんそれはまず某大関係の建物のある地域から始めてゆくことに考えていたが、それにしても彼は、まず真先にこの地震計を据^すえつけたい或る一つの場所を胸の中に秘めていた。

東京要塞

五郎造親方は、この頃になつて、脱のがれられない自分の運命を悟さとるようになつた。

始めは、いい儲もうけばなしとばかりに、何の気もなく手をつけた仕事だったが、一週間も前から、彼はこの仕事の性質の容易ならぬことに気がついていた。身の危険をも感じないではなかつたが、今となつてはもうどうにもならない。一行六人は、牢獄のなかに拘こうきん禁きんされているのも同然の姿だつた。

大体の工事が済んで、左官の仕事はもうあまり要らなくなった。それなのに、誰が頼んでも帰宅を許そうとしない松竹梅の札をつけた監督連だった。

一行六人は、毎日することもなく一室に閉じこめられ、ほうしよ飽食くしていた。

或る日、五郎造親方は、只一人呼び出された。左官の仕事道具をもつて出てこいというのであるから、これは仕事が出来たのに相違ないと思った。珍らしいことだ。これで四日間というものを、仕事なしで暮したわけだ。

五郎造親方は、久しぶりで長い廊下をとおり、見馴れた小さなくぐり戸から、例の工事場へ入っていった。だが彼の一生におい

て、このときぐらい胆きもを潰つぶしたことはなかった。

「呀あつ、——」

といったきり、彼は腰をぬかして、へたへたと漆喰しっくいの上に坐つてしまった。

見よ！ さきごろまでは、何一つ入れてないがらんとした空あき部屋だったのが、今はどうであろうか。その口径、およそ五十センチに近いと思われる巨砲が、彼の塗りこんだ漆喰の上に、どつしりと据えられてあるではないか。それは主力戦艦の主砲よりはるかに長さは短い、それでも砲身の全長は五メートル近くもあった。砲の胴中は、基き部ぶにおいて直径が一メートル半ぐらいあった。ずんぐりとした大攻城砲であった。

なんのための攻城砲か。まさかこの建物の中に、巨砲が据えられるとは気がつかなかった。五郎造でなくても、誰でもこれには腰をぬかすであろう。

巨砲の蔭から、士官が三人ばかり姿を現わした。

「おおっ」

五郎造は全身をぴりぴりと慄ふるわせた。

彼の三人の士官こそは、見紛みまがうかたなく某大国の海軍士官であった。五郎造は新聞紙上に、ニュース映画に、またS公園における忠魂塔除幕式の日、その某大国将兵の制服をいくどとなく見て知っていたのである。

(夢を見ているのではないか)

と疑つて、太股ふとももをぎゅつとつねつてみたが、やはり痛い。だからこれは夢ではない。

夢ではないとしたら、この場の有様は、なんという戦慄せんりつすべきことではないか。

砲架の上を歩いていた士官は、松監督をさし招くと、なにごとか命令した。

松監督は畏かしこまつて、五郎造のところへ飛んできた。

「おい、やり直しの仕事があるんだ。大急ぎでやってくれ。なに立てないって。そんなことでどうするんだ。じゃあ、こうしてやろう」

と、靴の先で、五郎造の腰骨こしほねをいやというほど蹴上げた。

五郎造は憤怒ふんぬのあまり、ふらふらと立ちあがることに成功した。「おう監督さん。おれたちは今まで黙って仕事をしていたが、この大砲はどここの国のものなんだね」

と、彼はぶるぶる慄える指さきで巨砲を指した。

「なんだ。今ごろになって、そんなことを聞くのか。分っているじゃないか。これは日本の大砲じゃないよ」

「ふむ、するとどこかの国の大砲だな。家の中にこんな秘密の砲台こしらを拵こしらえて、一体どうする気だ」

「そんなことを俺が知るものかい。俺もお前と同じように、備わやとれている身分だよ。なんでもいいから、お金を下さる御主人さまのいいつけ通りにしていれば間違いはないんだ」

「うむ、やっぱりそうか。じゃ、貴様も使われているんだな。俺はもう今から仕事をしないぞ。日本の国内にこんな物ぶつ騒そうなものを据えつけるような卑怯な国の人間に、いい具合にこきつかわれてたまるものか」

「なんでもいいから早くやれ、さもないとお前の生命いのちは無ないぞ。ぐずぐずすればこっちの生命まで危あいわ」

松監督はしきりに五郎造をつつつくが、五郎造はもうなんといつても云うことを聞かなかつた。

砲架の上うへにいた外国士官は、それを見るところつかつかと降りてきた。そして流りゅう暢ちやうな日本語で、

「貴方、なぜ早くやりませぬか。云うとおりにしないと、この大砲

を撃ちますよ。この砲口はどこを狙っていると思いますか。これを撃つと、大きな砲弾がとんでいって、或る重要な官庁を爆破してしまいます。そうすると、日本の動員計画も作戦計画も、なにもかも灰になってしまって、日本は戦争することが出来なくなります。どうです、撃つた方がよいですか」

「卑怯者。日本人には、そんな卑劣な陰謀をたくらむ奴なんかいないぞ」

「——それとも平和的に解決しますか。わたくしの政府は、いま日本政府に平和的条約を申込んであります。それが聞きとどけられるようなら、これを撃たないで済むのです。貴方がいま乱暴して、わたくしたちの云うことを聞かないと、やむを得ずこの大砲

を撃たねばなりません。どっちにしますか」

と、目の碧い^{あお}士官は、五郎造をつかまえて子供だましのようなことをいった。しかしその脅し^{おど}の文句の中にも、いまこの巨砲が某官庁に照準せられているというのは本当なのであろう。測量学の発達している今日、大砲の射手が目標を見て狙わなくとも、他の方法で観測した結果により、目標を見ずともうまく照準をつけることができるわけだった。ああしかし、この恐るべき攻城砲^{トタン}が亜鉛屋根の下に隠されているなんてことを、誰が知っているだろうか。

なんとかしてこの大秘密を知らせる方法はないものか。五郎造はもう自分の生命のことなどは思いあきらめた。

そのときであった。

奥まった扉ががらつと開かれると、顔を真青まっさおにした某大国土官が、一隊の兵士を連れてとびこんできた。

「大佐どの、大変であります。いま九機から成る日本の重爆じゅうばくが現れて上空を旋回しています。どうやらこの攻城堡壘こうじようほうるいが気づかれたようですぞ」

「なに、重爆が旋回飛行をやっているって？ それは本当のことか」

「本当ですとも。ああ、あのとおりに聞えるではありませんか、敵機の爆音が……」

「うむ、なるほど。これはいけない。東京要塞長はどこにいられ

るだろう。すぐ指揮を仰がねばならぬ」

そういつているところへ、けたたましい電話のベルが鳴った。

大佐といわれた士官はその方へ飛びついていったが、受話器を握って大声に喚わめいた。

「——はっ、そうでありますか。こつちの用意は出来ています。

いつでも発射できます。はっ、すぐ攻撃しろと仰おっしゃ有るのですか。

畏りました。では号令をかけます」

大佐は電話を置くと、隊員の方を向いて、

「気をつけ。——総員、戦闘準備。主砲発射方用意かた！」

いよいよ悪魔のような巨砲が、わが日本帝国の心臓部めがけて砲撃を始めることとなった。五郎造はもう逆ぎやくじよう上してしまった。

いきなり兵をかきのけて、砲架ほうかによじのぼろうとした。

「こら、なにをする」

どんと一発、傍にいる下士官のピストルから煙が出た。五郎造は棒のようになって、砲架から転げおちた。

恐怖の瞬間は迫る。――

しかしもうそれ以上、この物語をつづける必要はない。なぜなれば、その次の瞬間百雷が一時に落ちて砕くだけるような大爆音がこの室に起った。亜鉛屋根トタンを抜けて真赤な焰の幕が舞い下りたと思つた刹那せつな、砲身も兵も建物も、がーんばりばりと大空に吹きあげられてしまったから。

東京市民は、近きも遠きも、この時ならぬ空爆に屋外にとびだ

して、曇った雪空に何十丈ともしれぬ真黒な煙の柱がむくむくと立ちのぼるのを見上げて、不審の面持だった。――

今でも帆村莊六は、あの「東京要塞」とせんしやう僭称せんしやうしていた某大

国の秘密砲台の位置発見に大たいこう功こうをたてた自記地震計のドラムをガラス硝子張りの箱に入れて、自慢そうに持っている。その黒いドラム

の上には、あの特徴のあるとんとんとんという地響が白い線でもって美しい震動曲線を描かれてあった。そしてその下には、「昭和×年十二月七日、某大国大使館裏にて観測」と説明がうつつであった。そして彼は得々として客に云うのであった。

「――だから僕はいつも機会あるごとにとな唱となえていたものですよ。外国の大使館なんてものは、すくなくとも丸の内界かいわい隈わいに置いと

くものじやないとね。あの「東京要塞」の巨砲ですか。あれはマール号が本国から持ってきたんですよ。どうしてと行って、つまりあの忠魂記念塔の中に隠して大使館内に持ちこんだのですよ。

全く某大国にも頭脳あたまのいい人がいますよ」

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第5巻 浮かぶ飛行島」三一書房

1989（平成元）年4月15日第1版第1刷発行

初出：「サンデー毎日」毎日新聞社

1938（昭和13）年1月

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月6日作成

2009年7月31日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

東京要塞

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>